

ペン俳句会 句会報(三百六十一号)

令和六年十月三日(木)

兼題『翳雲』、席題『長』

句会を、今年九月と同じ場所で開催。出席八名。
投句十一名

中村 晃也

旅人になりたし今日の翳雲

山の辺の道果つるまで翳雲

人はみな夢想家になる翳雲

想ふこと言へずに別れ翳雲

長き夜や星それぞれのモノローグ

長崎の鐘聴くたびの愁思かな

宮原 凧

秋高し子らの声沸き日曜日

蓑虫や命ひとつを抱きめて

露けしや日々増してゆく物忘れ

面長は母の家系や鳳仙花

翳雲流れる先に父母の墓

西日射す玄関に置く三文判

志村 良知

北国へ飛ぶ眼の下に翳雲

秋彼岸正座に長き法話かな

翳雲島を映して湖静か

金色の巨木の梢北の秋

前栽の垣に這わせし鉄律

母命日残暑を剥る一湿り

松田 一文字

牧場に草を喰む馬翳雲

跳ねる鮎網に捕り込む釣師かな

秋晴れや長屋の井戸の長話

若き日の片恋淡く葛の花

白波の沖の利尻やすすき原

実は甘く値札は渋き葡萄かな

大津 そうかい

秋の蚊や長生きさほど楽でなし

泣き声は世界共通翳雲

いい風と呟く人と秋ベンチ

満ち足りて皿に背骨の初秋刀魚

揺れやまぬ夕日の影や猫じやらし

靄深き山路ひと本曼珠沙華ス

安藤 晃二

翳雲夕日を纏ひ地平まで

長靴で挑む秋暑の庭仕事

こほろぎの声再びの夜長かな

秋曇パンパスグラス盛りけり

秋雲の走る切先縦横に

森深しさくら紅葉の一樹立ち

長尾 進一郎

黄金田を抜け特急の街へ着く

目の冴へて辞書を読み継ぐ夜長かな

土手の芒夕陽を浴びて金の波

色づく田いよよ出番ぞ案山子たち

虫の音の中に長湯の夕べかな

はぐれずに皆で泳げよ翳雲

新田 ゆふき

重ね来し無駄多き日々翳雲

月映えの湖面に黒く山沈む

翳雲誘い込まる夕餉窓

二の腕に叩く蚊もなく夏逝けり

長き夜や枕辺に聴く英会話

青果店長茄子水茄子夕灯り

森田 元斐

傾きし木々そのままや秋出水

秋雨や川面に映る赤信号

大橋を過ぎるサイレン十六夜

人の世の喧噪見つめ翳雲

焼け焦げし野菊をいやす長き雨

秋の日のホームで頬張る握り飯

浜口 金魚姫

鳥渡る龍女の像の見守りて(大阪堺旧港龍女神像)

鳥渡る群れの一点煌めきて

想ふこと言葉にすべし翳雲

長月や亡母の日記をならべおり

バシャバシャと水浴ぶ鳥の星月夜

同じ場所同じ茎立て曼殊沙華

西川 知世

クルス墓芝に秋暑の影細り

海峡に架かる大橋翳雲

秋暑し丹沢の尾根長く曳き

糸瓜忌や廊下の隅に本の束

声かけて開く枝折戸白木蓮

秋うらら椅子に眼を閉づ抱き人形

次回は令和六年十一月七日(木)、明治神宮吟行。

雨天の場合は通常句会。兼題は季語「紅葉」(中

村晃也さん出題)、席題は西川知世さん出題の「深」

です。

追記

季語を学ぶ 初学にかえって

西川 知世

十一月の兼題は「紅葉 一切」となった。一切
というのは、秋の紅葉している木を題として句の
中に読み込むということ。カエデ類を代表とする
落葉樹の紅葉で言えば、歳時記の秋の植物の項に、
紅葉・初紅葉・薄紅葉・紅葉かつ散る・雑木紅葉・
満天星紅葉・合歡紅葉・葡萄紅葉・柿紅葉・梅紅
葉・柏紅葉・桜紅葉・白膠木(ぬるで)紅葉・柞

(ははそ)紅葉・櫟(くぬぎ)紅葉と枚挙にいと
まがない。折しも十一月の句会は吟行となる、今
年の暑さは尋常ではなく、まだどこを見ても夏の
樹木の態であるが、そのころにはすっかり秋の気
配が覆っていることだろう。

秋が深まると、木だけではなく、足元の草も色
づき、草紅葉となる。秋の深まりとともに、水生
植物も色づく。水草紅葉・菱紅葉は昭和初年から
の新しい季語。生活の項では、紅葉衣があり、行
事の項では、紅葉忌Ⅱ小説家であり俳人、尾崎紅
葉の忌日は十月三〇日。

色付くや豆腐に落ちて薄紅葉

築守が酒欲しがるや合歡紅葉

渋柿も紅葉しにけり朝寝坊

大紅葉燃え上らんとしつゝあり

障子しめて四方の紅葉を感じをり

一片の紅葉を拾ふ富士の下

多摩の水少し激する薄紅葉

柿紅葉マリア燈籠苔寂びぬ

この樹登らば鬼女となるべし夕紅葉

振り返るこの世短し初紅葉

大津絵の鬼が手を拍つ紅葉山

梅紅葉濡れやすくまた舞ひやすく

紅葉して桜は暗き樹となりぬ

櫨紅葉見てゐるうちに紅を増す

吉原は菊の盛りや紅葉忌

紅葉且つ散る暮れ際の段葛

恋ともちがふ紅葉の岸をともしして

芭蕉

柿麿

一茶

高浜虚子

星野立子

富安風生

山口青邨

水原秋櫻子

三橋鷹女

水原春郎

桂 信子

斎藤夏風

福永耕二

山口誓子

増田龍雨

深川知子

飯島晴子

奥能登の紅葉且つ散る社かな

滝沢伊代次